

プーチン大統領が進める 「愛国教育」と、その背景

小 東 由 男

2022年2月24日にウクライナへ侵略を始めたロシア軍は、ウクライナ軍による激しい抵抗を受け、当初もくろんだ「短期終結」が頓挫した。また、西欧米諸国はウクライナへの軍事的支援やロシアへの経済制裁を科した。最近ではウクライナ軍による「反転攻勢」の圧力に追われ、ウクライナ東部・南部の支配を揺るがす事態になっている。

そのような状況の中で、プーチン大統領は国内の結束と戦争継続のため、国民への情報操作と弾圧、プロパガンダを強化した。そのような動きのなかで俄かに注目を集めたのは「愛国教育」だ。NHKを始め、国内の報道機関がこの「愛国教育」の実情について一斉に報道した。この「愛国教育」は以前からの継続的な

政策であり、プーチンの目指す国家像の大きな柱となっている。その実情と、背景について述べたい。

1 忠誠心と愛国心を

育むことを目指す「愛国教育」

○9月1日に始まった新学期から、ウクライナ侵攻を肯定する新しい歴史教科書を導入

ロシア政府は、2023年9月1日に始まる新学期から、全国統一の新しい歴史教科書を導入した。セルゲイ・クラフツォフ教育相は8月7日に、この新しい教科書について公開・説明した。

それによると、この教科書は1945年から21世紀までの出来事をカバー。ウクライナ侵攻や第2次世界

大戦末期の旧ソ連の対日参戦に関する記述が盛り込まれている。2014年のクリミア併合でロシア兵が「平和を守った」という項目がある他、西側の制裁については1812年にロシアに遠征したフランス皇帝ナポレオン・ボナパルトより悪辣（あくらつ）だと非難する論調で書かれている。

ウクライナ侵攻に関する記述では、プーチン政権の主張が反映されている。たとえば、ウクライナ東部のロシア系住民の保護や安全保障上の脅威を取り除くため、人類の文明を守るためといった理由が記述されている。また、ウクライナを支援し、ロシアに制裁を科す欧米に対する批判も展開している。

また、第2次世界大戦末期の旧ソ連の対日参戦に関する記述では、北方領土の実効支配や北方四島の領有を正当化するロシア側の主張が大幅に拡充されている。中立条約の有効性には触れていない。

○プーチン大統領が児童・生徒30人を集めて「公開授業」を行う

担当したのはウクライナ侵攻で始まった愛国教育科目「大切なことを話そう」。月曜日の一時間目に行な

われている。

テーマは伝統的な家族の価値観や演劇・音楽など、一見、戦争とは関係のない内容だが、その中身はどれもロシアがほかの国より優れていると刷り込むためのものだと指摘する。授業のねらいはロシアという国家や国民がいかに特別な存在か植え付けることだ。愛国的な表現で私たちは一番だと強調している。

授業では偉大な祖国に貢献してこそ人々が憧れる英雄になれると強調。更に巧みな構成でより踏み込んだ思想を植え付けようとしている。大祖国戦争、宇宙飛行士や医師の英雄的な行動、そこに突然ウクライナでの特別軍事作戦が出てくる。身の危険を犯して祖国に尽くした宇宙飛行士やコロナ感染と闘う医師たちと並べてウクライナで戦う兵士を紹介。英雄は、他人の為に命を捧げられる人間だとして犠牲になることをたえている。

そして第2次大戦時と今を重ね合わせ「ロシア人を倒すことは不可能だ」と力説した。（注1）

○銃や軍用ドローンの操縦など、基礎的な軍事教育を学校で教える

日本の高校生にあたる生徒たちに、今後一年かけて銃の扱い方や軍事用の無人機の操縦方法など教えていく。ウクライナ侵攻が長期化し兵士の不足が深刻化する中でのこの方針について、クラフツォフ教育相は子どものうちから準備をさせておくことの重要性を強調した。

○ウクライナから子ども達を連れ去り、ロシアで愛国教育を受けさせる

ロシアは戦火から保護するとの名目でウクライナの子ども達を強制連行し、自国の愛国教育を強要しているとみられる。併合した東・南部4州の学校では、授業でロシア語を使用し、ウクライナとロシアの一体性を強調するロシア側の価値観教育が進む。

それでも子ども達をロシアに連れ去る理由について、ウクライナでは「養子縁組などを通じて」深刻な人口減少の緩和を図ろうとしている」との見方も出ている。

また、ロシアは9月30日、東・南部4州の新生児にロシア国籍を自動的に付与する制度を導入した。

プーチン氏に忠誠を誓うロシア南部チェチエン共和国のラムザン・カディロフ首長は16日、東部ドネツ

ク、ルハンスク両州などの子ども約200人がチェチエンで「軍事・愛国教育」を受けているとSNSで明かした。また、南部ヘルソン州の知事によると、10月下旬には州内の児童養護施設から5歳以下の子ども46人が南部クリミアに連れ去られたとのことだ。

ウクライナ政府によると、19日現在で氏名などが特定されているのは1万1225人で、ウクライナに戻ってきたのは103人。米国のプリンケン国務長官は7月13日の声明で、ロシアに強制連行されたウクライナ人が「90万〜160万人」で、うち「約26万人」が子どもであると指摘していた。

国際人権団体のアムネスティ・インターナショナルは9月10日に発表した報告で、子どもの強制連行については戦争犯罪にとどまらず「人道に対する罪」として調べるべきだ」と訴えた。

2 プーチンの権力掌握過程

○ソ連崩壊の経緯と影響

・ソ連は1991年12月にスラブ系3共和国首脳の協定により消滅した。ゴルバチョフ大統領は辞任した。
・ソ連崩壊後の旧ソ連圏は混迷の10年を迎え、多くの

国民がソ連への郷愁に駆られた。

・ソ連崩壊に伴う未解決の民族・領土問題は、ジョージアやウクライナ、ベラルーシなどで紛争や抗議運動を引き起こした。

○プーチン政権の対外戦略と対立

・プーチンは2000年に大統領に就任し、「強いロシア」の再建を掲げた。KGB出身者ら側近たちに基幹産業を管理させた。

・プーチンは中国や中央アジア諸国との連携を強め、「多極的世界の構築」に向かった。ユーラシア経済同盟やシリア空爆などで米欧と対立した。

・プーチンは2014年にウクライナのクリミア半島を併合し、欧州で初めて武力による領土変更を行った。欧米諸国から厳しい制裁を受けた。

○民主化への希求と抑圧

・旧ソ連圏ではジョージアやウクライナなどで「カラー革命」と呼ばれる民主化運動が起きた。ロシアでも反プーチン運動が拡大した。

・プーチンは「カラー革命」を陰謀とみなし、自らの強

権的政治体制を正当化しようとした。反体制派指導者ナワリヌイ氏を逮捕し、デモ参加者を大量拘束した。ノーベル平和賞受賞者のムラトフ編集長は「民主化なしに国を前進させることは不可能だ」と語り、ロシアなど旧ソ連諸国の指導者が求める強権的体制に異議を唱えた。

3 「愛国主義」政策

1) 愛国プログラムI

ソ連崩壊後のロシアでは、政治的経済的混乱とアイデンティティの喪失が生じ、ロシア（人）とは何かを問う直す必要性が生じた。プーチンは、この状況を打破するために「愛国心」を強調し、その結果、「2001年から2005年までのロシア連邦市民の愛国心教育に関する国家プログラム」（愛国プログラムI）を立案させた。

このプログラムは、ロシアの役割や歴史的価値観に基づいた「愛国心」の促進、国益の守護者たる国民の育成、そして「愛国心」を高揚させる効果的かつ機能的な国家システム構築の必要性を主張した。

特に、教育やメディアへの関与が「愛国」意識を抱

かせる手段として着目された。プーチン政権は、帝政期の戦勝とスターリン時代の祖国戦争での勝利を「愛国心」を高揚させるツールとして用いた。このプログラムの実現には、連邦機関と連邦構成主体が協力した。これらの取り組みは、ロシアの国家統一や社会経済的な安定確保を目指している。

2) 歴史政策

プーチン政権下のロシアでは、ソ連崩壊後の教科書記述のネガティブな評価から脱却し、「愛国心」を強調する新たな歴史教科書の編纂が進められた。

また、メディアの活用が重要視され、放送内容に一定程度の規制が設けられ、新たなテレビチャンネルの開設が行われた。さらに、オリガルヒの排除が行われ、主要なメディアは政権の支配下に置かれた。これらの動きは、大祖国戦争での勝利を讃え、国民の「愛国心」を高揚させることを目指していた。

また、連邦中央だけでなく、連邦構成主体でも同様の動きが見られ、地元の記念碑の名称変更や新駅の設立など、戦勝を記念する動きが各地で行われた。これらの取り組みは、国民のプライドを刺激し、意識改革

に取り組みむ一方で、帝政期の伝統も用いられ、国民の意識改革が進められた。

3) 「反カラー革命」としての

「愛国主義」政策Ⅱ青年層への「愛国」教育

2005年に「愛国プログラムⅠ」の改訂版である「愛国プログラムⅡ」が提出され、承認された。

このプログラムは、前プログラムの内容を基本的に踏襲しつつ、国旗・国歌などのシンボルの使用や予算増額などの変化が見られた。特に、本プログラムでは全国民を対象にしつつも、児童および青年層に優先的地位が与えられ、より一層の「愛国主義」振興策が講じられた。これは、2003年から2005年にかけての「カラー革命」が青年層を主たる担い手として生じ、その影響がロシアにも及ぶ可能性があったためだ。政権はこの危機感を受け、中央主導による青年組織の設立に着手し、青年層の「愛国心」を育成し、国家の安定を図ることを目指した。

4) 教員用指導書の作成

2007年6月、プーチン大統領は「愛国心」教育

と歴史・社会科学の役割について強調し、『ロシア現代史1945-2006年』という教員用指導書の出版を推進した。

この指導書は、「カラー革命」の理念を普及させないという政権の意志を反映しており、教育の場で政権の思想を若者に教え込むことで、「革命」をロシアで未然に防ぐことを目指していた。指導書では、スターリンのテロルやフルシチョフのスターリン批判には否定的な見解が示されつつも、旧ロシア帝国領土の回復や工業化、大祖国戦争での勝利などが肯定的に捉えられ、スターリン時代について肯定否定の両側面が記されていた。また、「カラー革命」に対しては否定的な記述が多く、これによりロシアの若者の政治意識形成に影響を与え、「愛国」意識を高める政権の思惑が明らかになった。(注3)

4 おわりに

ウクライナは1991年の独立以降、大統領選では親口派と親欧米派が対立してきた。2004年には選挙不正を訴える動きからやり直し選挙が行われ、親欧米派政権が誕生する「オレンジ革命」が起きた。14年

に親口政権が崩壊し、親欧米派のポロシェンコ政権が発足。ロシアが反発し、クリミア半島に侵攻して併合を宣言した。東部の一部は親ロシア派が支配し続けている。19年にゼレンスキー政権が誕生。

ロシアは親欧米路線をとる同政権を親ロシアに戻そうとしており、プーチン大統領はウクライナ人とロシア人が「ひとつの民族だ」と述べた。ゼレンスキー大統領は北大西洋条約機構(NATO)加盟への意欲を公言し、対立は根深い。そして、このNATOの東方拡大を重要な脅威として警戒していたプーチン大統領は2022年2月24日のウクライナ侵攻につき進んだ。プーチン大統領への底堅い支持は、「愛国主義」政策、「愛国教育」推進による効果が功を奏しているとも言える。また、国内の反対勢力への弾圧や世論操作、メディア支配の手法は、独裁政権と評される所以でもある。

洋の東西を問わず、独裁者は「愛国」の言葉を多用し、自己の政治的な目標の実現のために活用してきた。その巧みな宣伝文句にある真の狙いを見抜く国民の政治的な力量が問われている。

最後に、ダニエル・カーネマンの『あなたの意思は

どのように決まるか』で述べられている思考について述べたい。

カーネマンによると、思考には二つの段階があると語る。直感的で感情に根ざす「速い思考」と合理的で努力を要する「遅い思考」の相互作用だという。二つの思考の特徴を徹底解明し、人はいかに錯覚に陥りやすく不合理な決定を行なうかを浮彫りにした。「速い思考」は、印象、直観、意志、感觸を絶えず生み出して、「遅い思考」に作用しているとする。

その特徴は、

○プライミング効果：経験したことや見たたり聞いたたりした情報が後の行動に影響を及ぼすことを示している。例えば、「リンゴ」「グレープフルーツ」「ブドウ」「サクランボ」「レモン」といった単語を記憶すると、「ミン」を「ミカン」と答えるような影響が見られる。

○認知容易性：慣れ親しんだものが好き↓繰り返し見られる経験、見やすい表示、機嫌がいいなどの原因は、親しみを感じる、信頼できる、楽だと感じるといった結果をもたらす。

○確証バイアス：人間が思い込みから生じた仮説を検

証するために、自分にとって都合の良い情報はかりを集めてしまう傾向性を指す。例えば、ある事件に対して、特定の報道機関が自社の立場に合致する情報を強調し、他の情報を抑制して報じることがある。

○ハロー効果：対象の目立った特徴によって、他の要素部分まで際立つて見えてしまう心理現象のこと。例えば、見た目が良い人は性格も良いと判断されるなど、一つの良い特徴が全体的な印象に影響を与えるといった効果だ。

○自分が見たものがすべて：人間が目につきやすい情報や特徴には直ちに反応して行動を起こすが、目の前にない情報や事実には気づきにくいという性質。例えば、SNSやメディアで品薄情報が流れると、「大変だ。買わなくちゃ」と考えてしまい、買い占め行動に走る。しかし、その情報が正しいのか、今すぐ買う必要があるのかといったことにはなかなか気が回らない。

○感情ヒューリスティック：好き嫌いによって判断が決まる↓好みの党派というだけで、その主張に納得してしまふ。など。(注4)

バイアスへの転落を警戒し「遅い思考」の力を伸ば

して、情報発信者や伝達者の計略に陥ることのないようにしたいものだ。

〔注釈〕

〔注1〕プーチン政権「愛国教育」の内幕 戦場に導かれる子どもたち「クローズアップ現代 NHK」

<https://www.youtube.com/watch?v=G5TFNBvGfmc>

〔注2〕「ソ連崩壊30年、大国ロシア復活の野望と摩擦」

を要約 <https://www.nikkei.com/telling/DGZTSS000490YIA111C200000/>

000490YIA111C200000/

〔注3〕「プーチン政権下における「愛国主義」政策の

変遷」(西山美久、現 北海道大学助教、ロシア・東

欧研究 第39号、2010年)

〔注4〕『ウクライナ戦争をどうみるか』(塩原俊彦花

伝社 2023年)

(所員・こひがしよしお)

心にうつりゆくよしなしごと

退職して何年にもなるのに、現役時代のことをたまに思い出す。

(その一) 10年間勤務した高校で、ある日、隣の教室から大きな声が聞こえてきた。数年前に定年退職をして、非常勤講師をされている数学の先生の声だ。

「ここは重要なところだからね、しっかりとやっておいて！ いいかね、あとで聞くよ！ きくよ！

……………。そういえば、昔、「きくよ」という女の人がいたったなあ…………」。

(その二) 同じ高校で。文化祭が間近に迫っていた秋の日、クラスのだしものの責任者に「先生、5限の世界史の授業を、文化祭の準備の時間にください。今日やらないと間に合いません」といわれた。「担任なんだから、一時間くらい、わたしたちにくれてもいいでしょう？」と。「うくん…………」(周りの目もあるし、どうしようかなあ)。「世界史の授業(時間)なんて、馬に喰わせるほどあるでしょう！」。

(あつ、まいりました。)

(小野塚)